



TITLE:

東亞天文協會觀測部月報

AUTHOR(S):

CITATION:

東亞天文協會觀測部月報. 天界 1942, 22(255): 306-308

ISSUE DATE:

1942-08-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168422>

RIGHT:

観測部月報

Monthly Report, Observing Section, O. A. A.

★

東亞天文協會

★遊星面課報告 PLANETS

課長 伊達英太郎 (E. Date, President)

火星協同観測は別項連載の如くで好成绩を挙げ得た事は御同慶にたえない。
火星以外に現在迄報告された遊星表面のスケッチは下記の如くである。

		瀧 田 Td	保 積 Hz	富 田 Tm	渡 邊 Wt	綿 貫 Wh	蔡 Ss	計 Total
金星	Venus	3	5	0	0	1	0	9
木星	Jupiter	11	8	0	1	1	1	22
土星	Saturn	3	0	1	1	0	0	5
合計	Total	17	13	1	2	2	1	36

これは眼視観測に依るスケッチであるが、これ以外に木邊観測部長からは32極反射のカセグレン・ニュートン焦点に依る火木土星の美しい寫眞を送附され、瀧田氏は15極反射に18耗ケルナ・アイピースを使用して巧に木星金星を撮影された。瀧田氏の眼視及寫眞の比較観測は頗る興味あるもので、いづれ時期を見て口書に發表の豫定である。この種の試みは、永續される事に依つて高く評價されるのであるから、是非今後も、餘暇と視狀の許す限り續けて頂き度い。

金星、木星共に斷片的の記録では適當にまとめる事も不可能となり、切角の貴重な観測も持ち腐れとなるおそれが多分にあり、是非、一定期間中連續してスケッチされる事を望むもので、これは、太陽黒點の相對數と同様、一人丈けの努力でなく、數人のメンバーによつて、欠測の日を出來得る限り少くする様努むべきで、この意味から課長の立場として、内遊星と火星と木・土星との3分科に分割され、各科に適當なる幹事を置く制度に變更されん事を切望するものである。尙、金、木、土各星のスケッチは火星報告終了後適當に口繪として發表の豫定である。

—17.7.3—

★太陽課 SUN

幹事 大石辰次 (T. Oisi, Secretary)

追加報告 編輯部との連絡上十日の締切を嚴守して居りますから其後到着の報告は從來通り翌月の本欄で略報します。豫め此のことを御諒承下さい。

金田伊三吉氏(五月分) 日數25日 相對數平均24

太陽黑點相對數報告 (1942年六月) Sun-spot Relative Nos., May, 1942.

觀測者 Obs. (觀測地)	坂上 務 (鹿兒島市)	七高 天文部 (鹿兒島市)	津留 繁雄 (熊本市)	西山 峰雄 (福岡市)	明星 觀測班 (大阪市)	正田 源一 (大阪市)	笠井 泰雄 (京都市)	木邊 成磨 (滋賀縣)	加藤 裕成 (名古屋市)	竹内 潤 (名古屋市)	金田 伊三吉 (石川縣)	香掛 七二 (長野縣)	岩城 馨 (靜岡縣)	大石 辰次 (靜岡縣)	松下 淑 (東京市)	山田 勇次 (東京市)	保積 善太郎 (東京市)	高杉 重春 (東京市)	觀測個數 No. of Obs.
口徑 mm	42	180	122	32	150	38	45	75	75	32	55	102	30	55	47	75	75	55	十八名中
倍率 x	64	71	48	45	74	65	53	60	40	50	64	75	50	64	64	80	64	64	
方法	P	P	P	D	D	D	DP	D	P	D	D	DP	D	D	D	D	D	DP	
1	0	0	M	M	0	0	0	0	0	0	0	C	C	0	C	0	0	0	13
2	C	0	M	M	0	0	0	0	0	0	0	11	0	C	0	0	0	0	14
3	R	C	R	M	0	0	0	0	0	C	0	0	0	C	0	C	0	0	10
4	R	R	R	M	C	R	0	R	R	0	0	C	R	R	R	R	R	R	1
5	0	0	0	0	0	0	0	0	M	0	0	M	0	C	0	0	0	M	14
6	C	17	15	R	0	C	0	17	0	0	0	C	C	0	14	14	13	12	11
7	R	12	R	R	C	R	0	R	M	0	12	R	R	R	R	R	R	R	1
8	C	C	C	C	M	28	13	14	M	15	14	C	C	R	16	14	14	12	9
9	12	C	C	M	C	C	0	M	24	0	14	C	11	14	C	R	12	R	6
10	12	C	12	12	22	12	12	M	15	0	12	M	11	12	12	12	12	12	14
11	C	C	11	11	18	C	11	M	14	0	11	11	11	12	0	0	11	11	14
12	C	R	C	C	16	C	0	M	12	0	0	0	M	0	0	0	0	0	10
13	C	R	R	C	C	C	0	M	0	0	0	0	R	0	0	0	0	0	9
14	R	R	R	R	R	R	0	R	C	0	0	C	R	R	R	R	0	R	2
15	C	C	0	0	0	0	0	M	R	0	0	C	0	R	0	0	0	0	10
16	C	C	0	0	0	0	0	0	25	0	0	C	0	0	0	0	0	0	15
17	C	C	R	R	R	C	0	11	C	0	R	C	C	11	C	11	12	C	4
18	C	C	R	R	R	R	0	R	R	0	R	C	R	C	R	C	11	R	1
19	R	R	R	R	R	R	0	R	R	0	16	R	R	29	R	C	11	C	3
20	R	R	R	R	C	C	0	C	C	0	R	C	R	C	C	C	13	C	1
21	C	R	39	C	C	27	30	41	37	0	26	30	C	27	24	27	29	C	11
22	C	R	C	C	C	C	0	C	29	0	24	C	C	R	R	R	26	R	3
23	C	R	R	14	C	C	0	R	R	0	R	C	C	R	20	C	C	22	3
24	R	R	M	C	23	16	15	18	33	12	C	C	R	R	R	R	M	15	8
25	C	C	R	C	R	C	0	R	R	0	R	C	R	R	R	R	R	R	0
26	C	C	R	M	R	23	0	M	16	0	R	R	R	R	R	R	R	R	2
27	R	R	C	24	0	23	0	M	12	0	14	C	11	C	M	M	16	C	7
28	C	C	M	12	M	12	13	17	12	0	14	C	11	13	12	0	13	12	12
29	C	R	R	C	C	C	0	11	C	0	0	C	C	C	C	C	0	R	3
30	C	R	R	C	C	C	0	R	R	0	0	C	C	C	C	C	0	R	2
日数 Days	4	4	7	8	13	13	13	12	15	7	22	5	10	14	12	15	26	13	213
平均 Mean	6	4	11	9	8	10	6	11	15	4	7	10	6	10	7	5	9	6	

略符號については第 246 號を見よ。For the abbreviations, see No. 246.

観測状況 一年を通じて最も天候を懸念する季節であるが、本月は保積、金田兩氏の御奮戦によつて見事之を克服し得たのは、誠に貴重な努力であつて、観測時刻の不統一は之の間の苦心を明に物語つて居る。シーイングは之に反して例年の如く良好と考へられる。

黒點景況 保積氏の観測から推定すれば、無黒點日は12日を數へ、金田氏の報告も之に接近して居る。7日西半球で突發の群は11日西没前に消失し、17日東現の群は28日西没し、外に二群が極く短期間出沒したが目立たなかつた。要するに極小期に入つた譯であつて、今後直に活氣付くか或は更に續くか、現在の課員諸氏の大半が初めて迎へた極小期であつて、新しい経験である。缺測日は25日の1日だつた。

緯 度 沓掛氏に依れば北半球にて 10° と 5° の二群、南 10° の三群があつた。

雜 報 六月11日太陽黄徑 80° で入梅となり、爾後曇雨天連續し、相當變型の天候で之も黒點の作用とも思考されます。他に天然現象で範圍の廣狹に差異はあるが、數年來に珍しい結果が各方面に發見されると豫想されます。我々は斯る方面の觀察も怠つてはなりませんまい。

★流星課たより METEORS (129) 課長 小横孝二郎 (K. Komaki, President)

九月に來ると流星は急に少くなるが、それでも一年の平均數よりは多い。顯著な流星群はないが、次のものがその出現を豫想される。

期 間	極大日	幅 射 點		附 近 の 星	備 考
八月末～九月2日	九月1日	$\alpha=86^{\circ}$	$\delta=+41^{\circ}$	駁者 τ	速, 1911 II
中 旬～下 旬		13	+ 6	魚 δ	緩
21日頃		31	+19	羊 α	緩
27日頃		4	+28	アンドロメダ α	緩
下 旬		23	0	鯨	

× × × ×

前回報告後、東京市の栗原正雄氏から、本年上半期の観測を受取つた。毎月の観測數は下の如し。

	回 數	時 間 數 (分)	流 星 數
一 月	10	330	12
二 月	1	60	0
三 月	3	140	1
四 月	7	365	15
五 月	6	160	6
六 月	5	100	1